

「清末浙江留日学生群体研究」国際シンポジウムについて

高 田 幸 男（明治大学）

2025年8月21日～23日、中国浙江省杭州市の浙江工商大学において、「浙江文化研究プロジェクト“清末浙江留日学生群体研究”」国際シンポジウムが開催された。規模は小さいながらも、さまざまな意味で非常に印象深い会議であった。

まず、2025年は抗日戦争・世界反ファシズム戦争勝利80周年ということで、9月の北京における大規模なシンポジウム（出席者は会議閉会后、9月3日の軍事パレードも参観した）をはじめとして、各地で抗日戦争関連のシンポジウムが開催されたが、その多くは抗日戦争の「敵」である日本人研究者の出席はほとんどなかったようである⁽¹⁾。

これに対し、本シンポジウムは下記のとおり報告者16名中日本から6名（浙江工商大学から千葉大学大学院修士課程に留学中の応蘇氏を加えれば7名）、韓国から1名が参加し、お互いの観点や史料を突き合わせ、共有していこうという姿勢が前面に出ていた。また、その内容も以下の各執筆者が紹介するように、中国側の研究の質・量両面における進展を示し、あわせて日韓の研究者に協力をよびかけるものであった。

そこで、まずシンポジウムの概要を紹介したのち、呂順長氏の基調報告を中心に内容について紹介しようと思う。

本シンポジウムは浙江工商大学東方語言与哲学学院が主催し、浙江工商大学東西文明互鑑研究院（東亜研究院）と浙江工商大学日本研究センターが運営し、さらに神奈川大学人文学研究所が後援する形を取っている。浙江工商大学は、その名の通り商工業の人材育成を目的とする省級大学で、その起源は1911年創立の杭州中等商業学堂で、同学堂は中国で最も早く創立された商業専門学校の一つであるという⁽²⁾。また東亜研究院は、1989年創立の杭州大学日本文化研究センターに起源を持ち、2004年に浙江工商大に移り、現在では中国教育部（文科省に相当）の国別地域研究センターになっていて、修士課程、博士課程の人材育成もおこなっている⁽³⁾。

会期は8月21日～23日となっているが、実質8月22日一日だけで、21日は参加者の登録、23日は旧日本租界等の見学をおこなった（筆者は欠席）。

8月22日の日程と報告者およびそのテーマは表のとおり。

表 8月22日の報告者・報告テーマ一覧表		
時間	登壇者・担当者（敬称略）	報告テーマ等
午 前 の 部		開幕式、記念撮影
	呂順長（浙江工商大学 教授）	浙江文化研究プロジェクト「清末浙江省日本留学生群体の研究」の紹介
	邵清（浙江省社会科学界連合会 顧問）	論証専門家発言 1
	孫宏雲（中山大学 教授）	論証専門家発言 2
	孫安石（神奈川大学 教授）	論証専門家発言 3
	王宝平（二松学舎大学 教授）	論証専門家発言 4
		昼食
午 後 の 部 1	王侃良（浙江工商大学 副研究員）	報告 1：近代日本留学生データベース—構成、特徴と学術的価値
	高田幸男（明治大学 教授）	報告 2：清末民国期における日本留学と欧米留学
	山本一生（東洋大学 教授）	報告 3：東洋大学の中国人留学生
	郭夢壺（神奈川大学 助手）	報告 4：清末における江蘇省崇明出身者の日本留学派遣
	孫成俊（韓国成均館大学 教授）	報告 5：朝鮮人留学生雑誌『太極学報』と梁啓超
		休憩
午 後 の 部 2	見城悌治（千葉大学 教授）	報告 6：近代浙江省の日本留学医学生
	沈国威（浙江工商大学 教授）	報告 7：清末浙江省日本留学生と中日語彙交流
	朱虹（上海大学 副教授）	報告 8：近代中国の日本留学女子医学生—東京女子医学専門学校を中心に
	応蘇（浙江工商大学・千葉大学修士課程院生）	報告 9：清末海軍日本留学生（1906-1911）
	王婷（浙江越秀外国語学院 講師）	報告 10：清末浙江省日本留学生の浙江同郷会研究
	張小宇（浙江省徐霞客研究会副秘書）	報告 11：近代温州留日学生群体研究
		自由討論
	江静（浙江工商大学東方言語・哲学学院 院長）	閉幕の辞

さて、呂順長氏の基調報告「浙江文化研究プロジェクト『清末浙江省日本留学生群体の研究』の紹介」は、「清末浙江日本留学生群体の研究（以下、留学生群体研究）」の責任者として、その概要と進捗状況、課題について述べたものである。

「浙江文化研究プロジェクト（浙江文化研究工程）」は習近平国家主席が中国共産党浙江省委員会書記だった 2005 年に開始された省レベルの超大型学術プロジェクトで、「留学生群体研究」はその一角を占めるという。呂氏は、「浙江文化研究プロジェクト」は日本の科学研究費基盤研究 A のようなもので、「留学生群体研究」は同 B のようなものだと言ったが、金額的にははるかに超えるのではないだろうか⁽⁴⁾。

史料の収集面では、中国人日本留学生に関する史料を広汎に収集し、目下のところ延べ約 10 万人（うち浙江省出身者は約 1 万 2 千人）分の留学生データベースを構築しているとのことである。すなわち、実際には「浙江文化研究」の枠を超え、近代中国における日本留学研究全般の中心になっているのである。

さらに驚いたのは、史料読書会を組織し、日本側の外交文書等に多用される手書きの「候（そうろう）文」の解説を進めていることである。「候文」は、日本史研究者ではない筆者にとっても手に余るものであるが、「留学生群体研究」では、毎週開催される読書会を通じて日本側史料を使いこなせる人材を育成している。さらには「候文」解説ソフトも開発し、90数パーセントの解析力を持つに至っているとのことである。

こうした成果を元に、今回のシンポジウムにおいてもビッグデータによる分析や詳細な事例研究の成果が披露されたのである。おそらく浙江工商大学の「留学生群体研究」は中国国内の（ということは世界的にみても）日本留学研究で突出しており、今後、彼らとのさまざまな形での協力が不可欠になるであろう。

そこで、呂氏が今後の課題として指摘したのは、日本の各大学の学籍簿・成績表等の史料公開や新たな留学生史料の共同発掘の問題である。筆者は自身の報告で、明治大学の史料公開の困難についても言及したが、個人情報としての保護と歴史史料としての活用を、どこで折り合いを付けるか課題を突きつけられた。いずれにせよ、今後の研究において、彼らとの協力は欠くことができない。彼らの期待にいかに応えていくか、また、彼らにできない日本における研究の意義についても、考えさせられた。

注

- (1) 9月1～3日の北京におけるシンポジウムは出席者152名中、外国からの出席は約2割で、その内訳は日本が最多で6名（うち在日中国人3名）、韓国・ロシア各4名、アメリカ2名などとなっていた（2025年10月17日中国現代史研究会（東京）における久保亨氏の報告による）。筆者は8月15～18日江西省九江で開催された南京大学・ハーヴァード大学等共同主催「紀念抗日戦争勝利80周年国際学術討論会」、および8月26～27日に杭州で開催された「抗戦时期的中国与世界」学術研討会にも出席したが、いずれも日本人は筆者だけであった（前者は他に在日中国人学者が2名出席）。
- (2) 浙江工商大学のサイト「学校概況」による（<http://www.zjgsu.edu.cn/9/>）。2026年3月24日最終閲覧。
- (3) 浙江工商大学東亜研究院のサイト「研究院概況」（<http://dyjy.zjgsu.edu.cn/list.asp?nid=1>）による。2026年3月24日最終閲覧。ちなみに、正式名称にある「互鑑」は互いに鑑みるという意味であり、相互交流の視点を強調している。
- (4) 余談になるが、本シンポジウムの前後、筆者は浙江省各地の博物館や史跡を見学したが、施設や展示の充実度（沿海地区では、とくに古代から近代に至る日中交流に関する展示も多い）に驚かされた。「偉大な中華民族の復興」を印象づける意図があるとはいえ、潤沢な資金がうらやましい限りである。